

垂水史談会報

平成30(2018)年
8月発行 垂水史談会
第31号

【報告】

垂水島津家墓地の清掃ボランティア

八月十日(金) 早朝六時から伊集院史談会会長以下十六名により垂水島津家墓地の清掃ボランティアを行いました。
今回は五台の草刈り機も大活躍。約一時間後には驚くようにきれいになりました。

現在、大河ドラマ「西郷どん」の物語もいよいよ佳境に入りつつあります。垂水は西南戦争に従軍した四五〇人の若者たちのうち、八十五名が亡くなったゆかりの土地であり、また県では垂水を始め島津一門家の墓地について、国指定に向けた動きも始まっています。

これらを機会に、数多くの歴史愛好家や旅行者が垂水の旧跡や文化財を訪れてほしいものです。



市立図書館で戦争のパネル展

八月五日、七十三年目の垂水大空襲の日を迎えることから、史談会と市の社会教育課では七月三十一日から八月九日まで「戦争のあったころのことを知ろう」と戦争パネル展を開催しました。

パネルには戦時中の教科書、ラッパ、垂水大空襲関連の新聞記事や当日の罹災証明書、千人針のチョッキなど、もう一つは第六垂水丸沈没事故の写真や新聞記事、当日の乗船切符、

つかまつて助かったトランクなどを展示しました。

パネルの前には大人の入館者のほか、夏休みの子どもたちが足を止めて説明や写真に見入る姿が見られました。

(説明する会員の川崎あさ子氏)



【研究ノート】

川上忠實(周賢)墓碑について ④ 瀬角龍平

初娶肝付氏生忠豊忠利再娶町田氏生義次久興忠豊蚤死忠利与父同日見害義次先已出継三浦氏久直亦先已分異忠豊之子久清嗣自久清歴七世至親章即今家相是也其族若干家吉貴公時正徳四年使川上族之支別於垂城者改爲安山氏故垂城安山族多矣亦皆周賢子之裔也自周賢子歿至明和壬辰之稔百五十年于茲矣及忌辰其裔親賢親宣親芳胥議欲樹碑以祖績不朽而不果今也請余記之銘曰

維是士君股肱 匪独君股肱也
亦是公侯干城

安永乙未歲六月三日 侍読乾徹猷記

【読み下し】

始め肝付氏を娶り、忠豊、忠利を生む。再び町田氏を娶り、義次、久直を生む。忠豊は蚤死なり。忠利は父と日を同じうして害せらる。義次は先に已に出でて三浦氏を継ぐ。久直も亦た先に已に分異す。忠豊の子、久清嗣げり。久清より七世を歴て親章に至る。即ち、今の家相は是れなり。其の族に若

干の家あり。吉貴公の時、正徳四年、川上族の垂城に支別する者をして改めて安山氏と為さしむ。故に垂城に安山族多し。亦た皆な周賢子の裔なり。周賢子没してより明和壬辰の稔に至り、茲に百五十年なり。忌辰に及び、其の裔、親賢、親宣、親芳、胥議して碑を樹てて以て祖績の朽ちざらんことを欲すれども果たさず。今や余に請いて之れに記せしむ。銘に曰く、維れや是の士は君の股肱なれども、独り君の股肱のみに匪ず、亦た是れ公侯の干城なり。

安永乙未の歳六月三日 侍読・乾徹猷記す。

【注】

- ① 夭折、早死に。
- ② 分家
- ③ 垂水島津家の家老
- ④ 1714年
- ⑤ 1772年
- ⑥ 百五十年忌の年
- ⑦ 祖先の業績
- ⑧ 乾徹猷のこと。邑校・文行館教授
- ⑨ 1775年

—(この稿、終わり)—

内倉直吉墓誌

【旧大隅線、垂水市の新城駅東側の末川家墓域近く】



(左側面)

明治廿七年清国膺懲之師起君以陸軍歩兵一等卒奮然応召集苦戦彼国旅順口及威海衛之間奏絶代之偉勲遂至使

(背面)

彼請降不幸得病帰朝遂於熊本野戦病院溘然長逝時年二十有七

(右側面)

明治廿八年八月廿一日卒

【読み下し《墓誌》】

明治廿七年、清国膺懲の師起る。君、陸軍歩兵一等卒を以て奮然、召集に応じ、彼の国の旅順口及び威海衛の間に苦戦するも絶代の偉勲を奏し、遂に彼をして降を請はしむるに至る。不幸にして病を得て帰朝し、遂に熊本野戦病院に於いて溘然として長逝す。時に年二十有七

明治廿八年八月廿一日 卒す

【注】

- ① 朝鮮半島を巡る日本と清帝国の間の日清戦争(1894~1895)のこと。膺懲は懲らしめること。
- ② 師はいくさ。
- ③ 旅順口は、現在の中国遼寧省遼東半島の都市、大連市西にある旅順港の入り口。
- ④ 威海衛は現在の中国山東省の都市、現在は威海市。
- ⑤ 日清戦争では戦死・戦傷死よりも、戦病死の数が多かったとされる。特に中国大陸では脚気や凍傷など、台湾の戦地では兵士の間でマラリヤ、腸チフス、コレラなどが流行した。
- ⑥ にわかに、たちまち
- ⑦ 死ぬこと

【口語訳】

明治二十七(1894)年、清国(現在の中国)を懲らしめるため、(日本との間に)戦いが起こると、(内倉直吉)君は、陸軍歩兵一等卒として奮然、召集に応じ、清国の旅順口及び威海衛において、苦しい戦いの中にも絶代の手柄を立て、遂に清国に(日本に対しての)降伏を請わしめたのである。

(内倉直吉君は)不幸にして病を得て帰国したが、遂に熊本野戦病院において忽ちに亡くなったのである。時に年二十有七歳であった。

明治二十八(1895)年八月二十一日死亡。

(2017年10月転写・口語訳・鹿児島史料講読会)

—たるみず春秋— (タイトル変更)

巧言令色仁なき人やほととぎす

豊 純輝

世に巧言の実に多いことよ。それならまだしも「虚言」も堂々とまかり通る世の中だ。

使い手は安倍首相を筆頭に大臣、官僚ら目白押しだ。今後は地獄の閻魔様が舌を引っかく「やっ」とも休まる暇があるまい。ほととぎすの鳴き声は人間どもへの警鐘の声か。

時事句だが生活句としても味わえる作品。

(文：瀬角龍平)